

令和5年度蓮田市青少年問題協議会会議録

開催日時	令和5年11月13日(月)			
	午前10時00分 開会	午前11時30分 閉会		
開催場所	蓮田市役所 302会議室			
委員出席状況	氏名	出欠	氏名	出欠
	山口京子 会長	○	西山通夫 委員	○
	林義浩 委員	○	高橋健一郎 委員	○
	香川京子 委員	○	木村若菜 委員	○
	細村勇司 委員	○		
事務局等出席者	生涯学習部長 小宮雪晴 子ども支援課 課長 馬場邦明 副主幹 水沼哲也 主事 有泉千代子			
傍聴者	無し			
会議事項	議事 (1) 蓮田市の青少年健全育成事業について (2) 岩槻警察署管内の青少年犯罪の動向について (3) 意見交換 (4) その他			
会議資料	① 資料1 蓮田市青少年問題協議会委員名簿 ② 資料2-1 蓮田市青少年問題協議会について ③ 資料2-2 蓮田市における主な青少年健全育成支援 ④ 資料2-3 市内年度別 不登校・いじめ報告件数 ⑤ 資料2-4 子ども食堂について ⑥ 資料2-5 「学校を休みがちな子をもつ親のつどい」チラシ ⑦ 資料2-6 「ほっとスペースりあん」チラシ ⑧ 資料2-7 蓮田市子ども計画 計画の構成及び調査方法の比較 ⑨ 資料2-8 蓮田市子ども計画策定に係るアンケート調査 《子ども・若者育成支援に係るアンケート調査票》 ⑩ 資料3 蓮田市青少年問題協議会設置条例 ⑪ 資料4 地方青少年問題協議会法 ⑫ 資料5 [岩槻警察署提供]①少年からのシグナル			
会議経過(議事の要旨)				
1 開会 本日の審議会については、委員7人中7人が出席していることから、会議が成立する旨の確認を行う。				
2 あいさつ 山口市長(会長) 会長以外の委員6名 事務局 資料2-1「蓮田市青少年問題協議会について」を説明。(事務局)				

3 議事

(1) 蓮田市の青少年健全育成事業について

- ・現在の蓮田市における主な青少年健全育成事業（資料 2-2～2-8）を報告。（事務局）

【質疑・主な意見】

- ・不登校数が多いことが 1 番の問題である。「蓮田市内年度別 不登校・いじめ報告件数」を見ると、小学校の不登校数は増えていないように見えるが、実情は増えている。不登校の理由は、長期に欠席している児童のうち、少しでも不登校の要因があると積極的に不登校としてカウントするようになったからと事務局から説明があったが、実際は、休んでいるが日数が 30 日までいっていないので不登校として数えていない「隠れ不登校」の子どもがたくさんいる。20 日以上休んでいて明らかに不登校な子どもでも、朝起きられないといった自律神経失調症などの病名がつくと不登校としてカウントしないためである。新型コロナウイルス感染症明けに「隠れ不登校」の子どもが増えたので、新型コロナウイルス感染症の影響で人間関係が崩れたこと、体験的活動ができなくなり人と触れ合う活動ができなくなったことが大きな原因だと思う。教育委員会として、これをどのように立て直していくか考えていきたい。（委員）
- ・不登校まではいかないが、学校に午後や 4 時間目から行き、給食だけ食べに行く子どもがいる。そのような子どもの保護者に話を聞くと「うちの子どもは輪に入れない」と言っていて、新型コロナウイルス感染症が流行していた約 3 年間に体験的活動ができなかったことが影響だと考えている。その保護者が「輪に入れないなら家にいてもいいよ」と言ったら、子どもが「じゃあママずっと一緒にいて」となってしまい校長先生も困られていたと聞いた。親が子どもの言いなりになっている。その親子は市が提供し、埼玉県家庭教育アドバイザーが関わっている子どもの居場所「ほっとスペースりあん」に足を運んでくれたが、1 回だけで来てくれなくなってしまった。「ほっとスペースりあん」では親子で参加するパターンと、中学生以上の子どもだけで参加するパターンがあり、高齢者スタッフと手芸やボタン付けなどをすることで、家庭的な要素も取り入れて遊んでいる。また、「学校を休みがちな子をもつ親のつどい」も埼玉県家庭教育アドバイザーの 2 人が関わっている。1 人は元小学校の校長先生だったので色々な情報を持っており、もう 1 人は心理士なので心理士という立場から保護者に話ができるという利点がある。色々な場所で「ほっとスペースりあん」と「学校を休みがちな子をもつ親のつどい」について周知をしているが、市からもっと周知してほしい。（委員）
- ・「学校を休みがちな子をもつ親のつどい」と「ほっとスペースりあん」の参加人数は何名か。（委員）
- 「学校を休みがちな子をもつ親のつどい」は 1 回あたり約 5～6 名が参加している。「ほっとスペースりあん」は 1 回あたり約 2～3 名が参加している。「ほっとスペースりあん」については、11 月より NPO 法人「空飛ぶアヒル」の事務所でも開催しているので参加人数も徐々に増えていくのではないかと考えている。各学校にチラシは配布しているが、開催場所から遠い地域の保護者の参加は少ない。（委員）
- ・子ども食堂「はすっ子食堂」に関わっているが、新型コロナウイルス感染症の影響で場所が借りられず、食事の提供も難しいと思い休止をしていたが、今年度中に食材の提供をする「マルシェ」という形で開催できたらと思っている。実施日時や場所が決まったら委員の皆様にもお知らせしたいと思う。（委員）
- ・黒浜北小学校に設置している「適応指導教室エコー」は学校復帰を目的としているが、子どもの居場所は目的がまるで違う。これをどう受け止めればいいのか。（委員）
- 「ほっとスペースりあん」は、親子でずっと家にいると行き詰まり、子どもは音を上げないが親が音を上げる。いずれは子どもを社会に出さなければいけない中、どうしたら子どもを引きこもらせず、外に出せるかといったことを考えている。引きこもりがちな子どもを学校に戻せれば 1 番良いが、「学校は別に行か

なくてもよい場所」と思っている親が多い。居場所は、その子どもに合った場所であればよい。今の義務教育を受けている子ども達に「学校は行かなくてはいけない場所」と固定概念を押し付ける時代ではないと思う。子ども達は「学校に行きたい」「あの輪の中に入りたい」など誰も言わず、「私は私がいたい場所にいたい」と言うのである意味わがままなのではないかと感じる。このままでよいのか自分自身も危機感を持っている。(委員)

・「適応指導教室エコー」に通っている子どもは、親から勧められて本人たちが決定して来ている。通っている子どもは見てると笑顔でとても明るい。だが、1か月ほど経つと来られなくなってしまいう子どももいる。学校復帰の近道とまではいかないが、スムーズにいけば必ず学校へ戻れるように指導している。通う子どもが多くなってきており、前から通っていた子どもが集団に馴染めず来られなくなってしまった。そのような子どもに居場所づくりをしていく必要がある。「ほっとスペースりあん」から「適応指導教室エコー」、そのあとに学校復帰ができるよう繋いでいければと思う。(委員)

・引きこもり対策は市民要望でもかなり多い。引きこもりから脱したという成功例はあるのか。(委員)

→成功例はある。ずっと引きこもりで学校へ行けなくなった子どもがいたが、転校したら学校へ行けるようになった。「転校していいんだ」と思えるようになってから世界が広がったと言っていた。(委員)

・引きこもりやいじめが理由の転校は市内しかできないのか。(委員)

→転校は市内だと指定校変更ができる。市外だと市外の教育委員会とのやり取りになる。(委員)

・「ほっとスペースりあん」に参加する子どもはどんな子どもなのか。(委員)

→親子で来て、子どもだけが残ってずっとゲームをする他、子どもから積極的に大人に話しかけ、関わるなど様々な子どもが遊びに来る。(委員)

(2) 岩槻警察署管内の青少年犯罪の動向について

・埼玉県や蓮田市内の青少年犯罪の動向について事例を交えて報告。(林委員)

【質疑・主な意見】

・児童虐待が増えていると聞いている。原因はどういったものなのか。(委員)

→一般の方から「大きな声が聞こえる」や「子どもの泣き声が聞こえる」など通報が多くある。通報を受けたからには特定して事実関係を調べている。場合によっては書面通告をしている。(委員)

・保護観察処分とはどういった時になるのか。また、期間はどのくらいなのか。(委員)

→家庭裁判所の審判で保護観察処分がつき、保護司が定期的に面会する。期間は約2年～3年。(委員)

・未成年の再犯率はどうか。(委員)

→岩槻警察署管内の未成年の再犯率は高くないと思われる。不良行為は繰り返される傾向が多い。必ずその場で保護者に連絡し、引き渡している。(委員)

(3) 意見交換

・多くの子どもは、学校の休み時間に提出書類を集め、先生に呼ばれるなど忙しく、そのような子ども達はいじめているという自覚がないが、たまに復帰した子どもは役割がなく周りから取り残され、いじめられていると思う子どもがいることも確かである。自分の居場所がないと感じてしまうのも無理はない。(委員)

・不登校数が多いことが問題だ。本人が引きこもりを自覚していない場合が多い。コミュニケーションは「支え支えられる」が基本。集団の中で人間関係を作っていく基本は「せめぎ合って折り合ってお互いさま」だが、25年前から崩れている。これは現在の学習指導要領の特活に出てくる。相談があったら次回に繋げることが大事。家庭環境の問題があれば子ども支援課へ、福祉的な問題があれば福祉課へ相談しに行く。

「褒める・叱る・励ます」をセットで行えば子どももコミュニケーションが取れるようになり、人間関係も構築していけるのではないかと考えている。(委員)

- ・校長先生は学校の規模やレベルを見て柔軟に対応しなければいけないが、今の日本は一律になっている。ハードルの設け方が大事。10月に文部科学省「21世紀出生児縦断調査」で21歳の若者は全く本を読まないという子どもが約6割と結果が出た。10年前は10パーセントほどいたが、0パーセントになってしまった。自尊感情を聞く質問があるが、自尊感情は上がっている。自分のことが分かっていないのではないか。SNSを制限し、本を読ませることも必要である。(委員)
 - ・親が引きこもりの原因をわかっていない場合が多い。昔は学校へ行かなくてはならない場所とされていたが、現在は別に通学しなくてもよいと思われる。だが、学校は通学する所だという固定観念は社会で形成しなくてはならない。(委員)
 - ・保育園で体験的活動を取り入れている。公立だけでなく、私立や幼稚園でも取り入れるべきだ。(委員)
 - ・自転車事故が増えている。新中学生に交通ルールを教える機会を与えてほしい。(委員)
- 学校や市より、警察署の交通課や交通総務課、規制課へご連絡いただきたい。(委員)

(4) その他

(特になし)

4 その他

事務局より事務連絡

5 閉会

西山委員